

面談時における優先コミュニケーション・チャンネルの基礎研究

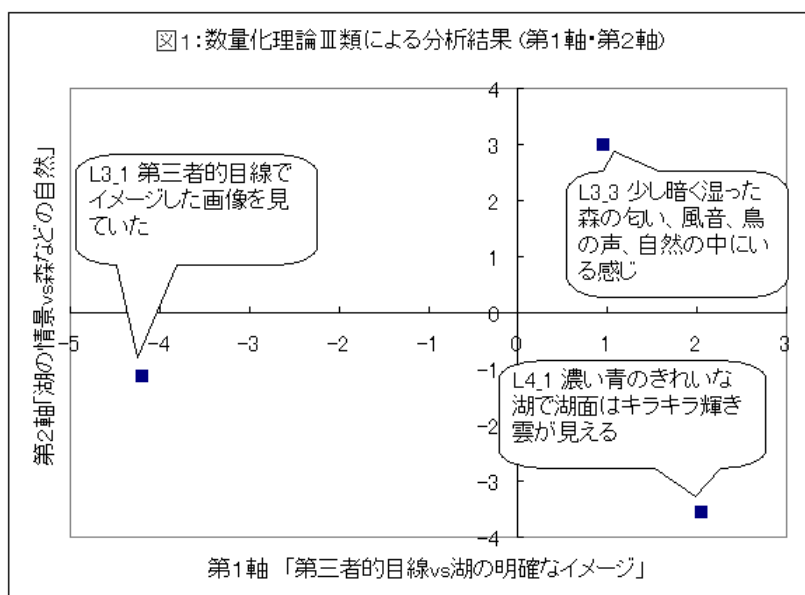
— 関連性評定質的分析を用いて

葛西俊治・札幌学院大学

Keyword: 優先コミュニケーション・チャンネル、間身体性、ミラー・ニューロン、  
神経言語プログラミング、関連性評定質的分析、数量化理論Ⅲ類

【目的】近年のミラーニューロンの発見(1996)とそれに基づく研究は、いわゆる「身映し body-echoing」的で直接的な身体感覚や、あるいはメルロ・ポンティによる「間身体性」を思弁的概念ではない実質的な観点として肯定しつつあり、言語未然の乳幼児あるいは言語喪失状態に向かうアルツハイマー病患者などとの交流を含めて、ミラーリング技法(mirroring)の再定式化の含め新たなコミュニケーション様式の理論化を促進しつつある。このため、身体心理療法的(body-oriented psychotherapy)アプローチが今後さらに脚光を浴びる可能性が指摘されるのに対して、身体感覚的な領域は必ずしも多くの人にとって優先的な感覚ではないことが考えられる。たとえば、エリクソン催眠に端を発する神経言語プログラミング(NLP: Neuro Linguistic Programing)は、視覚型・触覚型・聴覚型・デジタル(概念)型などの基本的な優先情報チャンネルについて言及しているが、その他にも筆者による予備的研究において体感型・嗅覚型・記憶型などがあり、さらに、同じ視覚型であったとしても視覚的イメージが静止しているか動いているか、写真的か動画映像的か、一人称的視点か無人称的(三人称的)か等々の多種多様な差異が見いだされている。そのように多様な感覚・知覚・認知様態の存在は、セラピストとクライアントが会する面談場面などにおいて、両者の優先情報チャンネルが合致しないことによるコミュニケーションの齟齬ないしミスマッチ、その結果としての誤解が一定の確率で起こりうることを推測させる。

本研究では、身体心理療法的アプローチの展開に先立ち、基本的な優先情報チャンネルを捉えていくための基礎的研究として、以下に示す「青い湖・白いヨット」課題の中での基本的な反応傾向を把握すること、および、その中に身体感覚的な要素を識別し身体療法的アプローチの基礎資料を準備することを目的としている。



なお、身体感覚的な研究にも関わらず視覚的なイメージ課題である「青い湖・白いヨット」状況を提示するのは、優先情報チャンネルとして一般的である視覚イメージ状況において身体感覚的ならびそれ以外の感覚・知覚・認知型がどの程度生起するのかを把握するためである。

【方法】カーペット敷きの部屋にてストレッチなどの簡単な準備体操を行った後、仰向けで横たわった状態で「青い湖をイメージしてください」と二度ゆっくりと教示し、約30後に「白いヨットをイメージしてください」と二度ゆっくりと教示した。そ

の後に体験内容の自由記述を求めた。記述内容を関連性評定質的分析\*1によって分析し、あらかじめ設定した「体験内容チェックリスト」に基づいて記述内容を評定し出現度数を得た。被験者は大学三年生: 男子学生5名、女子学生12名。

【結果】

自由記述内容(B5用紙、平均6.41行)を主に文章単位にカード化し、KJ法を基本として構成された関連性評定質的分析(KH法)によりカードのカテゴリ化・ラベル付け、そして空間配置を行った。カードとラベルの空間配置からカードとラベルの対応表を作成して林の数量化理論Ⅲ類を用いて分析した(SPSS ver.16)。算出されたカテゴリ・スコアの第Ⅰ軸から第Ⅳ軸を図1・2に示した。

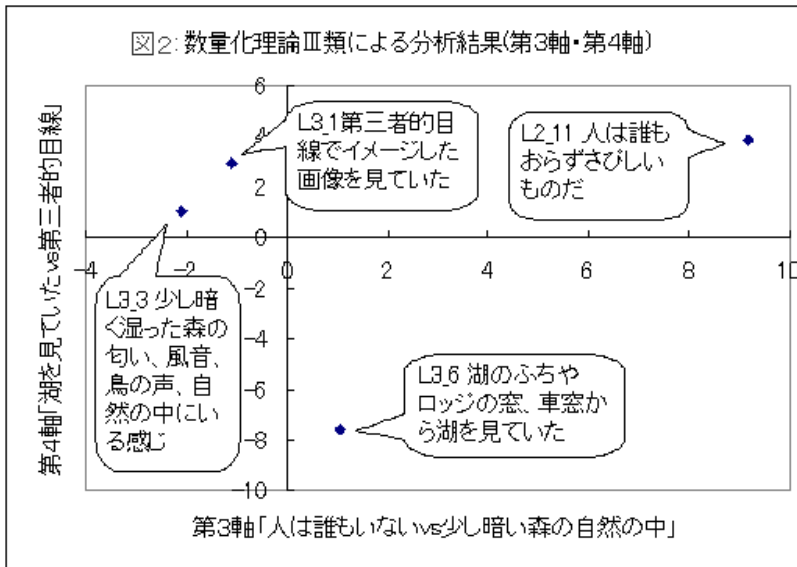


図1の横軸が第Ⅰ軸、縦軸が第Ⅱ軸、また、図2の横軸が第Ⅲ軸、縦軸が第Ⅳ軸である。第Ⅰ軸は「第三者的な視線」についての記述と「青い湖についての明確な記述」とが対比されており(固有値0.26895)、第Ⅱ軸は「湖そのものの視覚的情景」と「湖を取り巻く森の中での多様な感覚」とが対比されている(固有値0.20293)。第Ⅲ軸は「人は誰もいない」ことが強調され(固有値0.14236)、第Ⅳ軸も「湖のふちなどから見ている」ことが強調されている単極的な軸(固有値0.11027)といえる。

表1に体験内容チェックリストを示す。項目(a)「視線目線移動または場所空間位置」は「向こう岸には・右から左へ・湖の周りに…」といった記述内容、項目(b)「運動動作及びその形容」は「ぼっかり・現れた・行ったこと・揺れて…」といった記述内容、項目(c)「感じる思うなど心的内容記述」は「感じた・体験した・イメージした・想像した…」といった記述内容を含む。項目(a)(b)は視覚的表現であるが、そこに視線移動などの身体性や体感的要素が含まれていると考えられるため、体感型の副次的な指標としての可能性を確認するために用いられた。項目(d)(e)(f)も同様に身体的要素を副次的に含む指標として用いられた。

表 1

記述の出現度数	視線目線移動または場所空間位置(a)	運動動作及びその形容(b)	感じる思うなど心的内容記述(c)	風や感触などへの言及(d)	声や音(e)	匂いや香り(f)	その他の形容(g)	無人への言及(h)	度数合計	行数	行当たり記述数
平均(幅)	2.00(0-4)	3.94(0-9)	3.65(0-10)	0.41(0-2)	0.12(0-1)	0.53(0-6)	0.35(0-3)	0.35(0-1)	11.35	6.41(3-10)	1.76
標準偏差	1.32	2.33	3.27	0.71	0.33	1.50	0.78	0.49	5.35	2.03	0.49

表1から、極めて単純な「青い湖・白いヨット」課題においても体感的記述がある程度出現することが確認された。また、表1の三つの項目(a)(b)(c)についてみると、それらの出現頻度間にはほとんど相関はなく、体験内容が被験者間で異なっていることが明らかになった。さらに、視覚的イメージ課題にも関わらず音(「サワサワと・鳥の声」など)や匂い(「森・葉っぱ・湿った土の匂い」など)が記述されるなど多様な反応の存在が確認された。

【考察】比較的少数の被験者においても多様な反応と個人差が確認された。声や音・匂いの報告からも明らかのように、優先情報チャンネルの多様性が示唆された。これは、面談時の来談者・面接者相互の優先情報チャンネルが異なり、コミュニケーション・チャンネルが一致しない事態の存在を強くうかがわせる結果となった。

参考文献\*1 葛西俊治「関連性評定質的分析による逐語録研究—その基本的な考え方と分析の実際」

札幌学院大学人文学会紀要 第83号,61-100,2008

\*本研究は札幌学院大学2006年度研究促進奨励金による補助を受けた。